

# 【放課後身体検査～Sギャル編～】

※一部本編と異なる場合があります

「ぱちぱちぱいす」

「放課後身体検査～Sギャル編～」

「主人公と恭子は、クラスメートではあるもののほとんどの接点はナシ」

「もともとギャル風な女の子が苦手な」ともあって、彼女のことを避けていた

「どうりで、彼女のほうは前々から「いじめやすそうな奴」と主人公に目をつけており、それを実行できるチャンスを窺っていた」

「そんな事とは全く知らない主人公。その日も普通に過ごしていただが、ついに放課後に恭子と2人きりになってしまった……」

★トラック1：忘れ物を勝手に先生に渡されたから……  
●教室（夕方）

「あ～っ、だり～っ、ちゃんと鞄の中に入れたら

思つたのに……なんで忘れるかなあ」

「もうちょっとと早く思い出したら良かったのに……  
…はあ～っ、めんどく～」

「ん？ あれ？ あんた、何してんの？ もう  
とつぐに学校終わったのに……」

恭子

「日直？ あ～つ、ゴクローサン。それで？ 掃除でもしてたの？ つていうか日直って一人だったっけ？ もう一人いるんじゃなかつた？」

恭子

「……あたし？ えつ？ あたしだっけ？ あれ？ そうだっけ？ あははっ、全然知らなかつた」

恭子

「え～？ あたし、今日全然なんにもやんなかったよ？ あんた、なんで言わなかつたの？」

恭子

「忙しそうだから？ 友達と喋ったりしてるのが？ ぶはっ、それ忙しいっていう？ 変な気の遣い方してんね～」

恭子

「今、何してんの？ 忘れ物のチェック？ あ、そうだ。あたし、忘れ物したんだつた」

恭子

「あ、そういう。机の中に本があつたっしょ。友達からの借りもんだから、そのままにしておくわけにもいかなくつてさ～」

恭子

「なくしたら絶対ガチギレされる……  
…あれ？ ない」

恭子

「ねぇ、本は？ 机の中になつたの見たんで  
しょ？ どこかやつた？」

卷之三

「えっ…？ 職員室…？ 先生のと「る持つてつたの…？ なんで…？ ……そりや忘れ物だけ…？ 先生のと「にじつたら返してもらえるわけないじゃん！ ビーしてくれんのよっ…！」

恭子 ああう るうへつ

恭子  
「はあ……あんた、なんて」としてくれたのよ。  
今から先生んと」行って取り返しへきて  
よつー」「

「なんだつて……あんたのせいだしょ……あのま  
まにしておくれたら回収できたのに……」

「もおお……文句言われるのあたしなんだか  
らね……」

恭子「ほんとにどうしよう……何か考へないと……落ち着いて……落ち着いて……まずは座つて……」

恭子  
「あんまりやりたくないけど、同じもの買うしか  
ないかな……でも、限定品とか言ってたし  
なあ！」

「ん？ 何よ？ ……机の上？」  
しょ、机の上に座るくらい」「別に普通で

恭子

「足? 上げてる? 足上げてるからなんなのよ  
…………って、ああ、もしかしてパンツ見え  
た?」

恭子

「ふふふ、見たんでしょう。今更後ろ向いたって  
遅いのよ」

恭子

「ふうん、そーなんだ。あんた、人の物先生に  
渡したくせに、人のパンツ覗き見するような奴  
だつたんだ」

恭子

「見るつもりはなかつたつて……やっぱり見たん  
じゃない!」の変態つ!」

恭子

「あんた……」れはちょっとこのままで済ますわ  
けにはいかないよねえ。責任とつてもらわないと

恭子

「どうやって責任とるか? そうだな、とりあえ  
えず…………あんたもパンツ見せなさいよ」

恭子

「なに驚いてんのよ。あたしだつて見られたんだ  
から、あんただつて見られなきやフュアじゃない  
でしょ」

恭子

「それとも、このまま逃げるつもり? 人のパン  
ツ見て、それでなんの償いもしないつもりな  
の?」

恭子

「……おつ、やけに素直じゃん？ それじゃ、誠意つてものを見せてもらわないとね」

「ほり自分で脱ぎなさいよ……見ててあげるかい……」

「もちろん本気よ。ほら、早く。他に誰か来てもいいの？ ……あ、前から見ててあげる」

「

★ニアック<sup>2</sup>：ちょっと触つただけなのに……

「はい、どーぞ。…………ぶぶつ、何恥ずかしがつてんのよ。まだ脱いでもないのに」

「わっよ。」から見ててあげる。あなたの股間の真正面から

「はへやへく、脱きなさいってば。……それともあたしが脱がせてあげよつか？」

「…………ああ、もう！ じれったいんだか

「…………男なら潔く脱ぎなさいよ……」

「もうじつとして！ あたしが脱がせてあげるか

「…………ほり、手、邪魔つ！」

「よし！」

「ふはっ！ 何よつ！ なんで大きくしてんの

「よーえつー、マジで！？ 勃起してん

「のーー！」

恭子

恭子

恭子

恭子

恭子

恭子

「

5 / 56

恭子

「ええ～？ ねえねえ、これってどういうこと？  
まさかとは思うけど……あたしのパンツ  
見て、おつきくしちゃったの？」

恭子

「それって……ちょっとヤバくない？ 人の物  
とつて、人のパンツ覗き見して、それで勃起と  
か……もう犯罪レベルじゃない」

恭子

「ダメダメ。こんな変態な事して、絶対に許さな  
いから。もっと償つてもらわないと……」

恭子

「やうだ！ あんた、パンツも脱ぎなさいよ。勃  
起してるとこ」覗せて。それで許してあげる」

恭子

「そんなのできないって、できるできないの話  
じゃないでしょ。人のパンツ見てちんこ勃起さ  
せて……その償いだつて言つてるじゃない」

恭子

「恥ずかしい？ あたしだつて恥ずかしいわよ。  
だつてパンツ見られたんだもん。恥ずかしいに  
決まってるじゃない。つていうか、男がパンツ  
見せるのとは意味が違うっていうか？ ちんこ  
まで見せてやつとフェアって感じよね～？」

恭子

「ほり、手どけて。脱がしてあげるから。……そ  
れとも、明日みんなに言っちゃう？ あんたが  
あたしのパンツ見てちんこ勃起させてたって」

恭子

「嫌? そりやあ嫌よね? だつたら通りに  
しなさいよ。早くその手をどけて。抵抗するん  
じゃないの」

恭子 「そりやあ嫌よ? あと、ちんこもおつ  
立ててなさいよ。それじゃあ……」

恭子 「ふはり…………す!」……ギンギンじゃないの  
よ。しかも意外と大きいし……」

恭子 「へえ、これがあなたのちんこなんだ」

恭子 「先っぽ真っ赤……血管も浮き出ちゃって……  
……もしかして、あたしに脱がされて興奮し  
ちゃった?」

恭子 「……ねえ、これで最大? 時間経つたから  
ちょっと萎えたりした? ……えーつ、自分で  
わからんないの?」

恭子 「せつかくならなあ……いちばん勃起してる  
と!」……見たいんだけど」

恭子 「無理? なんですよ。さつきあたしのパンツ見た  
じゃない。それを思い出せばいいでしょ」

恭子 「こんな状況で無理って……緊張してんの?  
通にエロい」と考えればいいじゃない」

恭子

恭子

恭子

恭子

恭子

恭子

恭子

恭子

恭子  
「あ、でも待って。要するに口の気分になれば  
いいんでしょう？ だったらあ……」「うう  
のはどう？」

恭子  
「ふう~~~~~」

恭子  
「何つて？ ちん」に息をかけてるのよ。……  
…ぶぶつ、キスでもすると思つた？」

恭子  
「さすがにや」までサービスするわけないじゃな  
い。息を吹きかけるか……ちょっとくら  
だつたら、触つてあげてもいいナビ？ シンシ  
ンツヒ」

恭子  
「シンシン。ぶぶつ、何よ今の反応。びくつし  
ちゃつて」

恭子  
「興奮したりするの？ デキデキしてもひとつ勃起  
したつしない？」

恭子  
「別に指でちょつと触るぐらいいだつたら……」「う  
やつて……じじつてあげてもいいんだけど  
……」

恭子  
「ほひ、ちん」の裏側をなでなで……  
なでなで……」「……」

恭子  
「あ、ちょっと硬くなつてきた？ もうきより膨  
らんでるみたいに見えるけど……」

恭子 「ねえ、どうなの？」 女の子に触られたのって初

めで? .....「うん、そうなんだ」

「じゃあ…………当然、童貞だよね？　だから、パンツ見ただけでちんこ勃起させちゃうんだ？」

「じゃあ、ソリハーハのせビア!!」ソリヤヒで先つ  
ぽのぼうに指を絡めて……ちよつとシロシロす  
る感じで……

「ん♪あひーーー も、もやあああひーーー」

「ち、ちょっと！ 何してんのよ！ 普通、いきなり出す！？ つていうか出すの叫すまで

「うつわ、制服にかかったし……マジ最悪……  
どーしてくれんのよっ！？」

「んうう、くわわ……あつたな！ ちょっと…  
あんたの制服貸しなさいよ！ なんで？ 拭く  
のよ！ 決まってんじやない……」

卷之三

「ああ～っ、もう……！」んなの一度と着れない  
じゃない。あんた、弁償してもらうからね」

恭子

「『めん？ 謝って済むわけないじゃない！ ちょっと触ったくらいでぶつかかるつてどう神経してんのよー』」

恭子

「わざとじゃない？ 気持ちよすぎて我慢できなかつた？ .....はあーつ、『だから童貞は』

恭子

「.....でも、そんなに気持ち良かつたんだ？ 『んに早く出しちゃうくら』」

恭子

「わう.....早漏なのかと思つたけど.....違うの？ 違つて嘘つてことは、普段はもうちょっと時間がかかるつて」と

恭子

「フッ、何慌ててんのよ。自分で言つたんじゃない。 .....で、どーなの？ そういうことでいいの？」

恭子

「ふうん.....童貞なのに時間がかかるつてことは要するに、オナニーの時間がかかるつてことよね？」

恭子

「あはははつ、なにマジで照れてんのよ。キモイわ～。そうだ。こんな事したんだから、当然これも償つてもらわなきやね」

恭子

「うーん.....決めた！ あんたわあ .....今こで.....オナニーしなさいよ」

恭子 「えつ？ ジゃなくて、今ここでオナニーしながらいつて言つてんのよ」

「当然じゃない。そのへりの恥ずかしい」として  
「もはやないと、償いにならないでしょ」

恭子 「せつかくの機会だから、あんたのオナニーが正常かどうか確かめてあげるわ。……まつ、身体検査みたいなものだと思つたらいいんじゃない？」

恭子 「ほら、つば」「べり」「ほり」  
握つて。……どちらの手で握るの？ 右？ 左？」

恭子 「……ふふつ、やつちなのね。じゃあ始めなさいよ」

恭子 「やつやう……やつじう感じね。……そんなにゆづくらなの？ 最初は「のへり」？ ふうん」

恭子 「……フッ、今、声出た？ なんか気持ち良やそ  
うな感じの。……気持ちいいんだ？」

恭子 「ああ、だんだん速くなつてきた。ふうん、そつ  
いつ握り方でやるんだ」

恭子 「いつつもそういう感じ? 自分の部屋で、そんな感じでオナニーしてるの? ……もしかして、毎日?」

恭子 「へえへつ、そりなんだあ……あ、でも、家では何も見ないってわけじゃないんでしょ? なに使つてんの?」

恭子 「へつ? じゃなくて、わかるでしょ。オカズよ、オカズ。どーせ家ではHロジ画像とか動画見てシコつてんでしょ? そのくらいわかつてんのよ」

恭子 「言ひなさいよ。どんなの見てんの? 正直に言わないと、みんなバラすわよ」

恭子 「ふうん? いつもは清純系のグラビアを見たり……、時々は企画もののAVをねえ……。あんた、結構むつりじゃない」

恭子 「ふふふ、でも…………やつらの見てるのに、あたしのパンツで勃起しちゃったんだ? 初めて女のY字の生パン見てドキドキしちゃったわけだ?」

恭子 「あつ、手の動きが速くなつた。……あははっ、さつきより声出てる。おもしろーい」

恭子 「もうすぐ? もうすぐ出るの? ……あ、そろそろ正面はヤバイか」

恭子

「横にいれば大丈夫よね？ せつかくだから、近くから見ててあげる。今度は思いつきり前に飛ばしていいわよ」

恭子

「…………はい？ 近くに来られるダメって何？ 緊張するから？ 今更何言つてんのよ。それとも出すと」「見せてよ」

恭子

「余計な事言つてないで、Hロイ」と考えてシロればいいんだから。簡単でしょ」

恭子

「…………だからあ、チラチラー」お見るんじゃないわよ。集中しなさいって言つてるでしょ」

恭子

「…………ねえ、どんだけ時間かかるの？ ちょっと飽きてきたんだけど。本当に出す氣あるんでしちゃうね」

恭子

「ちん」は相変わらず勃つてゐみたいだけど……ん？ 何？」

恭子

「言い方？ 何が？ 「ちん」の「ん」？ 「ちん」がどうしたつての？ ……ト品？ え、何？ 「ちん」って言い方のこと？」

恭子

「はあ？ あんたそんなの気にすんの？ あはははっ、どんだけ純情なのよ。ちんくらいみんな言つてるつて」

恭子

「マジだつて。あんた、女を綺麗なものに見すぎ。男のいないとこじゃ、みんなけつこーバンバン言つてんだから」

恭子

「ほり、うちのいいんちよとかも純情そうに見えるけど、あいつ男の見えないとこじゃムチャクチヤ言つ奴だからね」

恭子

「まつ、信じらんないならそれでもいいけど……今はそれに集中しなさいよ。手え止まつてない……？」

恭子

「んんっ？ 何シヨツク受けてんのよ。…………あつ、あんたもしかしていいんちよの事好きだつたの！？」

恭子

「あははつ、ごめんね。本性ばらしちやつた。でも、女なんてそんなもんよ。現実が知れて良かったじゃない」

恭子 恭子

「つていうか、さつさとオナつてよ。あたしだつて暇じゃないんだから。楽しんだら早く帰りたいし」

恭子

「そんな気分じやなくなつた？ あんた、どんだけメンタル雑魚なのよ」

恭子

「…………いいわ。このまま帰るのも消化不良だし、特別サービスしたげる」

恭子

「何をつけて。決まつてるじゃない。あんたが自分でできないって叫ぶなら……あたしがしてあげるわよ」

恭子

「ほら、手だけで。してあざむいてるんだから」

恭子

「なに間抜けな顔してんのよ。まさか意味わかつてないんじゃないでしょうか?」

恭子

「はあ……あんたマジで童貞なんだ。」の流れでしてあげるついたら手コキに決まつてんでしょう

恭子

「何驚いてんのよ。そーよ。手コキよ。あたしの手で、あんたのちんこシコシコしてあげるつて言つてんのよ」

恭子

「いいからあたしに任せなつて! あんただつて悪い話じやないでしょ!」

恭子

「あはは、すいへん熱くなつてゐる。めちゃくちや期待してんじやない」

恭子

「だいじょーぶよ。別に初めてじゃないし。……そりややつでしょ。この歳にもなつて未経験とか、そっちのほうが恥ずかしいわ」

恭子  
「とにかく任せなさいつぱい……  
持ちよーへしてあげるから」

恭子

「ふふつ、」つやつて触つてみるとやはりぱり大きいわね。あんたの性格と正反対」

恭子

「あははっ、何よその声。もう感じてんの？ いわよお。好きなだけ感じちゃいなさいよ。女の子から手コキしてもらえるチャンスなんて、アンタの人生これで最初で最後かもしないし」

恭子

「最初はここまでやるつもりなかつたけど……やるからには徹底的に搾り取つてあげる」

恭子

「んつ…………んつ…………んつ…………あ、なんが出てきた。ちんこの先からなるぬる出できたんだけど？」

恭子

「何よ。せつきは緊張して出ないとか言つてたのに、女の子に触つてもらつたらもうこれ？ あんた、もしかしてこの展開狙つてたの？」

恭子

「……あははっ、そんなに思いつきり否定しなくつたってわかってるわよ。あんたにそんな事できるわけないでしょ」

「気持ちいいんだ？ ちんこのシロシロされて、もうガマン汁出しちゃつたんだ？」

「んっ？ 何照れてんのよ。…………ええつ、ガマン汁つて言い方のこと？ やこまで恥ずかしがる、普通？」

恭子

恭子

恭子

「あ～～～、そつか。女の子の口から、『うい  
うの聞いたことがなかつたんだ？ ちん』とか  
ガマン汁とか……」

恭子

「じゃあ…………もつと聞かせてあげよつか?  
ちん』シロシロしながら、超Hロジ」と囁いて  
あげよつか?」

恭子

「ふつ、あはははつ、顔真っ赤だし！ どつち?  
聞きたじの？ 聞きたくないの？」

恭子

「…………わう、聞きたいのね？ だつたら、  
ちやんとやつ言いなさいよ。恭子ちゃんの口か  
りエッチな言葉を聞きたいですつて」

恭子

「ほ、ひ、ぬつて。  
ふつ、よくできました」

恭子

「（耳元での囁き） それじゃあ、あんたのちん  
」、もつと気持ち良くなっちゃう。あたしの手で  
シコシコして、ちん』もつと硬くしてあげる」

恭子

「あははつ、また声出たし。興奮する？ 耳元で  
女の子がエッチなこと囁つのつて興奮するの？  
それとも……もつと下品なほうが興奮するタ  
イプ？」

恭子

「（耳元での囁き） 聞きたい？ あたしの口から  
ちん』つて聞きたい？ もつとちんこちんこつ  
て囁つてほしい？」

恭子

「（耳元での囁き） ちん、ちんシロシロ……あ  
んたのちんシロシロしてると。ちんの根  
元から先っぽまで、あたしの手でしごてるの  
よ」

恭子

「（耳元での囁き） ちんの先っぽからぬるぬ  
る……ほら、おちん汁が出てる……おちん  
汁、おちんの亀頭に塗り塗りしてあげる」

恭子

「ん、ふう……どっちがいい？ ちんのほう  
が好き？ おちんのほうが興奮する？ どつ  
ちも同じあげよっか？」

恭子

「あはは、わわわ、その声。あなたの声……  
ちょっと可愛いじゃない。もっと聴かせない  
よ」

恭子

「」「やつて、ちんシロシロしてあげるから……  
おちんの先っぽを包み込むようにして、お  
ちん汁をちゅくちゅくさせながら擦つてあげ  
るから……」

恭子

「だから、もつと興奮しなさいよ。ちんおつ立  
てなさいよ。……特別サービスで、こいつぱい  
ぬつてあげるから」

卷之三

「(耳元で囁き) あん! ハッピーハン  
ハッピーハン! ハッピーハン! ハッピーハン!  
ハッピーハン! ハッピーハン! ハッピーハン!

「ふふ、さすがにガッテンナーナ  
おへその間、  
までそりかえつて……」

「」「れなが出る？　また射精しちやう？　おちん  
一からぶしゃって精液……おちん」「ミルク出し  
ちやう。」

恭子  
「田しなむじ……搾り取つてあげるから……おち  
ん」「ルク、デ・ペ・ペ・ペ出しちゃいなさい  
よ」

「おちん」から……おちん」「ルク……おちん」「  
から……おちん」「ルク……おちん」「から……  
おちん」「ルク……おちん」「から……おちん」「  
ルク……おちん」「から……おちん」「ルク……  
おちん」「からおちん」「ルクウウウ……！」

恭子 「あははははっ、もう限界？ 体、ガタガタ震えて……あはははっ、今のですっ！」い興奮したんだ？  
おちん」「ミルクウが良かつたんだ？ だつたらドドメさしてあげる。もっと気持ちいい擦り方してあげる」

恭子

「「うやつで、ちゃん」から出たおちゃん」汁を手の  
ひらにたっぷりつけて……それでちゃん」の先つ  
ぽを包み込んで……ふぶい、もう声出してるし  
……まだ擦つてないわよ」

恭子

「ねつよ。」のまま。「おちゃん」汁でぬるぬる  
の手のひらで亀頭だけをぎゅっとして、それを  
……シロシロシロシロ……シロシロシロシロ……  
……ちゃん」の先っぽ、おちゃん」汁でシロシロシ  
シロシロシロシロオホオ~~~~~!」

恭子

「あははっ、ガクガクしてる~、ほりあ、氣持  
ちいいでしょ~、たまんないでしょ~、こ  
のままイカせてあげるわよ」

恭子

「あん」をシロシロ……おちゃん」汁でシロシロ……  
……あん」をシロシロ……おちゃん」汁でシロシロ……  
……シロシロシロシロシロ……

恭子

「ああ、もう本当に限界なの? イキやつなの  
ね? だつたらちゃんといいなさいよ。イクと  
きはイクつて。いいわね? このまま続けてあ  
げるから……あつ……イキなさい、イッちやい  
なさい」

恭子

「はう、はう、はう、はう、はう、はう、はう、はう、  
……」

恭子

「あつ~、あはつ、飛んだ~、いつたじやな  
い。ちゃんとイケて……」

恭子

「え……。まだ出るの？ エフ、エフ……まだ  
こんなに飛ぶの？ 普通、最初の一発目が一番  
す」いんじやないの？」

恭子

「うつわ、す」ふー？ わつ、何これ！？ エエ  
ええつー？ ……わつ、まだ……メチャクチャ  
出でるんですけどー？ マジでー？ あんた、  
どんだけ溜めてんのよ」

恭子

「あ…………あ、落ち着いてきた？ あ、でもま  
だ出でる…………うつわ…………あんた、す」過ぎで  
しょ」

恭子

「…………終わり、かな？ それともまだ出る？  
もつ少し……擦つたら出る？」

恭子

「あ、ダメ？ もつ触らないほうがいいの？ ふ  
ふつ…………そつか。イッたあとつて敏感になるん  
だっけ？」

恭子

「まつ、いいわ。とりあえずここまでにしてあげ  
る」

恭子

「あ…………ちよつと手についたやつた。ほら、あん  
たの……おちん」「ルク……」

恭子

「別に謝りなくていいって。こんなのが  
るつ…………」「…………まだつてできるんだか  
」「ひ

恭子 「あ、そっか。こんなのは初めてよね？ あなたの精液舐めてくれる女の子なんて……」

恭子 「ふーん、そっかそっか……初めてかあー！」

恭子 「だったら…………もうちょっと味わってみるのも悪くないかもね」

恭子 「何をするつもりなのかって？ そうねえ……ん」「も汚れちゃったし、綺麗にしたほうがいいと思わない？」

恭子 「だから…………フュ・ラ・チ・オ、してあげよっか？」

★トライック4：童貞ミルクのお味は……？

恭子 「は？ ジやなくて、フュラチオ！ 知つてんでしょ、そのぐりぐり」

恭子 「ちん」「ちん」だって汚れてるし、綺麗になるじゃない。それとも、そういうのは嫌だつたりするの？」

恭子 「ふーん、その反応を見る限りだと、嫌つてわけじゃなさそうね。…………って、ちょっと。また勃起してきてんだけど？」

恭子 「あははっ、体は正直つてヤツ？ 本当はしゃぶつてもらいたいんでしょ？」

恭子

「そのままよ。あんたは何もしなくていいから……」「うせこんなのも初めてなんだろ？」「しつかりおつ勃ててなさいよ」

恭子

「ん、すんすん……男の臭い……れろつ……れろつ、れろつ、れろつ、れろつ、れろつ、れろつ……」「

恭子

「ふふふ、こんなので声出してんじゃないわよ。まだ舐めただけじゃない」

恭子

「ちんこ、綺麗にしてあげるから……れろつ、れろお～つ、そのまま立つてなさいよ」

恭子

「れろおつ、れろおつ、ん、はつ……れろれろれろつ、れろお～つ、ん、ちゅつ、れろつ、んんつ、濃い味……れろれろつ、悪くはないわね」

恭子

「ほら、先つぽのぼつも……れろつ、ちゅつ……れろれろれろれろつ……ちゅつ、ちゅつ……」「ふふ、あなたのちんこにキスしちゃった

恭子

「あ、どーせキスも初めてなんですよ。あははつ、口よりも先にちんこで経験しちゃったのね」

恭子

「れろつ、れろれろつ、ちゅぱつ、んつ、れ  
ろおつ、れろおつ、ん、はつれろれろれろつ……  
なによ、ちゅつ、まだ、先っぽから……ガマ  
ン汁出でるみたいだけど?」

恭子

「もう2回も、れろつ、出したのに、ちゅつ……  
まだ溜まつてんの? れろおくくつ」

恭子

「別に出したかったら、ちゅぱつ、出しててもいい  
けど……ちゅぱぱつ、れろつ、それも、ちゅ  
ぱつ、舐めてあげるし……」

恭子

「んん、ふ、フヨラチオつて久々だけど、れろお  
くつ、童貞ちんこは初めてかも……れろおく  
くつ」

恭子

「ん、ちゅつ、れろつ、れろおつ、んぱ、れ  
ろつ、ん、ちゅつ、れろつ、れろれろれろれ  
れろおおくつ」

恭子

「あ、またこんなに硬くしちゃつて……れ  
ろおつ、これなら本当に、んつ、まだまだ、れ  
ろつ、出せそうね」

恭子

「ほひ、裏筋のとこ……れろつ、れろれろつ、  
集中的に、ちゅつ、舌で責めてあげる……れ  
れるつ……」

恭子

「ガマン汁も、ちゅつ、ちゅううつ、キスしながら、  
んふつ、吸い出してあげる、んんつ」

恭子 「んはあつ、ああつ……れろつ、れろつ、れ  
ろつ、れろつ、れろつ、れろおおおう  
うつー」

恭子 「ふふつ、両脚ビクビクしてゐる……綺麗にしてゐ  
だけなのに、そんなに気持ちいいの？ すつご  
くイキそうな顔してゐんだけど」

恭子 「また……いかせてあげよつか？ 今度はフニラ  
で……れろれろつ、舐めるだけじゃなくて……  
咥え込んで弄んであげよつか？」

恭子 「イキたいんでしょ？ また、ちんこイキたいん  
でしょ？ ぢゅつ、れろつ、れろれろつ…  
…」

恭子 「ちょっとサービスしそぎな気はするけど…  
いわよ」

恭子 「れろつ……れろつ……だつたら、そつねえ…  
…れろれろつ、ほぐのちんこしゃぶつてくだ  
さじ……って、言つてみなさい」

恭子 「やつよ。れろつ、れろれろれろつ、ちゃんとと聞  
えた、ちゅうつ、フニラでいかせてけあげ  
る」

恭子 「ほら、聞いなさいって。  
ぶぶつ、まあそれでいいわ」

恭子 「それじゃあ約束通り…………あなたのちごー」、  
しゃぶつてあげる」

恭子 「はむつー、ん、んつー…………んぐ、う、ん  
んんんー……」

恭子 「ず、ぢゅぱー…………ぢゅぶるー、む、んぐー、  
ん、んつーすー」、あ、むつー…………意外  
と、れふー、口の中、ん、パンパン…………」

恭子 「ん、んつー、ぐ…………れろー、ず、ぢゅー  
れれろー、ん、ふあ、うー…………れろおーー」

恭子 「ふふー、変な声出しちやつて…………ぢゅるー、  
そんにちん」氣持ちいい。」

恭子 「れひー、ん、ぐつー、むぐー、ぢゅるー、  
ぢゅぶー、ん、んつー、なるなる、したのが、  
出できでぬ」

恭子 「ふ、ふんうー、ぢゅうー…………ぢうー、ぢうー  
ろおーー、ぢゅー、ぢゅるー、ぢゅるー、女のに、れ  
ろつ、ん、ふー、ちごー」、しゃぶられてる、れ  
ろつ、氣分は…………。」

恭子 「初めてだから、あ、んむー、んぐー、感動し  
ちゃった? んつー、ぐ、う…………んぶー、れ  
ろつ、口の中も、ぢゅるー、ちんこの先  
ぽ、ぢゅるー、舌でペロペロしてあげる  
「ふであってあげる」

恭子

「れろおひ、んぐひ、ず、すずひ、ちゅひ、れろ  
れろひ、むぐ、う、ぢゅபひ……んんひ、ぬる  
ぬる、れろひ、どんどん出でわいる」

恭子

「んふふひ、しょっぱこ……んはあひ、これが、  
れろひ、あんたのちんこ」の、れろひ、味なの  
ね」

恭子

「んはあひ、れろひ、ず、ちゅひ、あたし、けつ  
こ一うまいのよ。」「うやつて、ず、ちゅひ、  
口、窄めで……ん、んんひ……ちんこ」の、カリ  
に弓っかける感じで……ぢゅپひ、ぢゅپひ……  
……」

恭子

「氣持ちいい、でしょ、ぢゅپひ、ちゅうとぢゅ  
ひ、ぢゅるひ、速くなるわよ、んぐひ……ん  
ぐつ……」

恭子

「で、あんたは、ぢゅるひ、ゞ」が、ん、ん  
んつ、いじのへ、「んなふひ」、む、ぐ  
う「ひ、んぐべつ……ぢゅぽひ、根元のせうか  
ひ、ぢゅねひ、吸い上げられる感じ?」

恭子

「それとも、ん、ぢゅひ、ぢゅپひ、ぢゅپひ、  
ぢゅپひ、先っぽだけ、ん、んつ、しゃぶられ  
る感じのせうが、ぢゅるひ、いい?」

恭子

「んふふひ、やの反応を見る限りだと、ん、れ  
ろお~~ひ、どつちも気持ち良さげだからど

恭子

「れろり、ん、むぐうり、ちるー、パンパン、ん  
んうり、せつせつ、手口キあんなに出したの  
に、れろり、ちゅう、まだこんなに硬くなるの  
ね」

恭子

「れろり、ちゅう、ピクピク震えちやうり、ん  
んうり、れろり、また大きくなつてない？ ふ  
ふう、んぐう、んぐう、ちゅう、ちゅうるる  
るつー」

恭子

「えつー。今のもじー？ ちん！」 吸い上げられ  
ると氣持ちいい？ ん、ふう、ちゅうふう、これ  
が好きなり、れろり、れろり、ず、ちゅう……  
しばりへ、集中してやつてあげる」

恭子

「むぐうり、そ、そぐ、ちゅ、ちゅうびうふ、ちゅ  
ふう、そ、ぐ、むぐうり、そぐう、そぐそ  
ぐ、う、むぐう、ちゅうるる、ちゅうふう、ず、  
ずつふ……」

恭子

「ちゅうぶうり、むぐ、そ、んちゅうり、ずつふ、  
ずつふ、む、ぐ、ぐぐう、う、んぐう、む、  
ちゅうるる、ずつふ……んう、んう、ん  
ぐうううう……」

恭子

「ズぶあつ、ふ、あ……れろおつ、あ、むうつ、  
んぐう……ん、ぐ、ぐぐう、んつふ……む  
ちゅう、ちゅうるる、ちゅうふ……んうん  
ん、うつ……」

「ん、ふうひ、ぢゅむり、ちん」、そぐ、う、べ  
クドク、しる、ん、ぢゅうひ、そぐ、ん  
ぐつ、ん、ぐ、じうじう、む、ぶり……ぢゅ  
う、う、う……」

恭子  
「出したかったら、んぐ、う、出したくも、いいけ  
ど、ちゅるるつ、むぐつ、せりと玉すと、  
ぢゅむうつ、もつたいないんじやない。」

恭子  
「人生初の、ぢゅるつ、フエラチオなんだから、  
んぐつ、んぐうつ、たっぷり、んぐつ、ぢゅ  
ぶつ、味わないと、ぢゅぶつ、んぐつ、ん  
ぐう、むつ、ぢゅぶぶつ……」

「もひど、強く、さべり、む、ぐうう、ぢかる  
るひ、吸い上げて、あげる、びゅふひ、ず、ず  
ずひ、ぢゅるるるるひ、す、すあひん……んひ、  
ぐ、びくびくびくびくびくびくびくびくびく

「んふふつ、カワイイ声、んぐつ、出して、くれ  
ちやつて、ぢゅぶるつ、ん、んうつ、むぐ  
ぐ、うつ、んぐうつ、んぐじぐつ……」

「ん、けほつ、こほつ……。ちよつと、あんた、今……腰振つたでしょー。」

「」ほつ、」ほつ、喉に当たつたじゃない！

「アーティストは死んでしまう」

「いい？ 今度やつたら途中でやめるわよ。」「ここまで来てそれはきついでしょ？ だったら大人しくしてなさいよ」

「ふうう…………やれじやあもひー度…………あんまりひ  
……ふふふ、すいー、震えてる」

恭子  
「んぐっ、んぐっ、む、ぢゅあふっ、じつでも、  
ぢゅるるっ、おちんこー!!ルク、んぐ、ぢゅっ、  
出してじいから、ん、んぐっ、む、ぢゅる  
るっ、ず、ふ、ぢゅるるるっ。」

恭子「わゆつぱ、わゆつぱひ、む、ぐうひ、んぢひ、  
ごぐり、ごぐり、む、ぐぐ、ちやぶつ、ちや  
るむつ、む、ぐうひ、……」

恭子 「ん、ふああつ……はあつ、れろつ、れろれ  
ろつ、ん、ふふつ、ほら、こんなに糸引いでる  
……れろおつ……！ あなたの、ちんぽのガマ  
ン汁よ、れろつ、れろれろつ、ちゅつ……！」

「んあつ……あむつうひ……ん、んん、ぐつ  
んぐつ……」

卷之三

「かをひ、かをひ、田代へ むぐ、田代  
い、アリヘ えぐひ、えぐひ、も、かをひ、  
のま、えふひ、かをむるひ、田代もごこ、  
かひね、えぐひ、む、じうひ、かをひ…」

「むぐ、うつ、やう、よ、んんつ、フエラ、なん  
だし、ちゅぶつ、口の中、に、んぐつ、出し  
て、いひつて、む、ぐうつ、三つてん、のよ」  
「んふふつ、特別、サービス、う、んぐつ、ん  
ぐつ、ん、んん、んんんんうつ、む、ぐ  
うううううううううううううううううううううう

「そんなん、丑いって。 むぢゅう、いつでも、いいわよ、ぢかるつ、ずつ♪、ず♪♪ず♪♪つ、む、  
ぐうつ、ぢかるるるつ、ぢかる♪……全部、  
む、ぐうつ……受け止めて、あげる」

恭子  
「んひ、んひ、んぐひ、ひ、んぐひ、む、  
ぢゅうぶ、ぢゅうぶひ、む、んぐひひ、ひ、  
ず、すぢゅう、すぢゅう、すぢゅう、ぢゅう  
るひ、ぬぬひ、すぢゅうぬぬぬぬぬぬぬぬ

「えぐうわー…………？」う、ぶつ……ん、んんっ

.....גַּדְעָן, הַרְמָה, נִזְנָה, וְגַדְעָן.....

「」ほつ、う、んんつ、」ほつ、「ほつ……す」

「結構苦しかったあ」

恭子  
「ぶぶつ、意外とすごい量だつたわね。びっくり  
しちやつた。…………んんっ、喉に絡む」

「ちょっと大丈夫？ そんなにハアハアしちゃつて……満足した？ さすがにこれだけ出したら不満はないわよねえ？」

恭子 「……って、まだ勃ってるんだ？」 あんた意外と  
絶倫なのかしぃり……

「せりきから思つてたんだけど……悪くなさわうなのよね。あんたのちん」……。案外、相性良かつたりしてね

恭子 「そう、相性。……わからない？ 相性って言つたら決まってるじゃない。体の相性よ」

恭子

「ええつ、ここまで書いて首傾げるの？ それわざとじゃないわよね！？ ……はあ、要するにちん」とまんこの相性がいいかもしないって書いてるのよ」

恭子

「あははは、何照れてんのよ。あんた、本当にこうじつ葉に耐性ないのね」

恭子

「書つたでしょ。男子のいないところだったら、みんなちんこまんこけつこーバンバン書いてるつて」

恭子

「誰々のちんこ」が良かつたとか、まんこがきつかつたとか」

恭子

「あははは、なんで田舎者らすのよ。あんたちょっとおもしろすぎ」

恭子

「なんか……ちょっとマジになってきたかも……これで終わるのつてもやもやするし」

恭子

「はつ？ ジゃなくて……わかるでしょ。あんただつて、これで終わつたら消化不良なんじゃないの？」

恭子

「……本当にわかつてないんだから。もう少し勉強しなさいよね」

恭子  
「まつ、童貞だから仕方ないかな。本氣で想像もできてないみたいだし、教えてあげる」

卷之三

あたしね……スイッチ入っちゃつたみたいなん  
だよね……ふふつ、意味わかんないでしょ。ス  
イッチなんて言われても

恭子  
「要するに……」んなふうにしたくなっちゃった  
わけよー

「ふふ、よく考えてみたら、あたし童貞ちゃん  
一回で食べたことないのよね。こんなチャンス  
逃したらもったいないじゃないじゃない」

「わからないの？」  
「んながいに押し倒されても、  
さすがに想像つくでしょ」

「…………はあ、本当にわかつてないの？ あん

「あ、本当にわかつてないの？ あんたって本当に童貞なのね。こんなふうになつたらやる」とひとつのじゃない

「あんた…………あたしとセツクスしなさい」

「あははっ、何その顔っ！ どんだけ驚いてんのよ

恭子「そーよ、セックス。したくなっちゃったのよ。  
あんたのちんこしじいたりしやぶつたりしてたら  
……だから、責任とりなさいよ」

恭子 「なんでって……女だって口の気持ちになつたりする時があるからよ」

★トラック5..童貞ちんこをいただきます

恭子

「あんたいつもピクピク縮こまつてるような奴だけど、こっちのほうはそういうじゃないみたいだし」

恭子  
「ほら、おつ勃てなさい。萎えさせるんじゃないわよ。これから入れるんだから」

恭子  
「……だから、なんでもまたそこでびっくりしてんのよ。セックスするって言つてんだから当たり前じやない」

恭子  
「あ…………もしかして、あんた女の子のアソコ……見た」とはない？　あははっ、あるわけないか！　童貞だもんね！」

恭子  
「そつかそつか、だつたらそういう反応になるわよねえ。ふくふん、見たことないんだあ」

恭子  
「じゃあ…………どうする？」

恭子  
「何がって、わからない？　わからないなら別にいいけど……残念ね、せつかくのチャンスなのに……」

恭子  
「なあに？　意味がわからないんでしょ？　だったらそんなにあわてる必要ないじゃない。……ん？　ちょっと待つてって？　何を待つのよ？」

恭子

「見たい？ 何を見たいの？ はつきり言つてみ  
なさいよ。…………ぶはつ！ あたしの大丈な  
と」「はつて…………ダメダメ、もつとちゃんと  
はつきり言わないと」

恭子

「何を見たいのか…………はつきり言つてみなれ  
いよ」

恭子

「やつよ。ちゃんと聞つたら見せてあげる。……  
……嘘じやないわよ。本当に見せるつてば。見  
せなきやセックスもできないし」

恭子

「見たいでしょ？ したいでしょ？ 「んなチャ  
ンスも一度とないかもしねないのよ？」

恭子

「あ、ちん」「がビクッとした。本当はしたいんで  
しょ？ ……どうするの？ あたしは気分が  
乗つたけど、無理やりしようとは思わないし……  
…」

恭子

「ほひ、どうするのか言いなさいよ。あんまり遅  
くなるんだつたら、あたし帰るわよ」

恭子

「ふふつ、わかった？ それじゃあ聞つてみなれ  
い。…………ふふつ、いい  
わ。や」「まだ聞つなら……見せてあげる」

恭子

「あんたはそのまま寝てていいから……」「んな感じで……あんたの顔に近付けて……あははっ、なに用えそらしてんのよ。それじゃ見えないじゃない」

恭子

「見えてる？ セリヤあんたの顔の近くで」「んなに脚開いてるんだから、パンツは丸見えよね」「でも……今から見るのはパンツだけじゃないでしょ。もうとす」「じもの見るんでしょ」

恭子

「じゃあ…………」「ハヤヒトパンツに指を引っ掛けた…………」「ふふふ、チラチラ見るくらいなりずっと」いち見てなさいよ

恭子

「これが……女の子のおまんこよ」

恭子 恭子

「…………」「初めて見るでしょ。生よ。無修正のまんこよ。クリトリスまでぱつちり見えるでしょ」

恭子

「あ、勃起してる。ちん」「パンツじゃない。これならセックスもできやうね」

恭子 恭子

「ふふつ、今からあんたの童貞ちん」「……あたしのまんこ」で食べてあげる

恭子

「よじょ……あんたはそこで寝てていいからね。どうせ何したらいいかわかんないでしょ。全部あたしがやつたげるから」

恭子

「あははつ、さつきよりギンギンになつてゐるんじゃない? セリヤセリヤね。初めてのセックスなんだから」

恭子

「これが……女の子の中よお……」

恭子

「んんつ……はあつ……入つて、きたあ……あはつ、あたしも……けつこー一濡れちゃつてるから……一氣に入つちやう」

恭子

「ど? わかる? あんたのちん」「まん」の中に、入つてんのよ……んんつ……」

恭子

「ほり、締め付けてあげる……んつ……んんつ……どーみ、ふふつ、どーよ!」れ。ちん!」が締め付けられてるのがわかる?」

恭子

「あ、でもすぐにはイクんじゃないわよ。つていうか中でイッたらダメだからね。さすがにそれは却下」

恭子

「イキやうになつたらイキやうつ」と。わかつた? ……じゃあ、動いてあげる」「んつ……んつ……んつ……んつ、う……う……う……う……そういうえば、あ……あたしも……久しぶり、だつたつけ」

恭子

「なんか……ちようどいいかも……んんつ……いい感じの、とこ、当たる……んうつ……」

恭子

「あははっ、なんて声出してんのよ。本当に……んくっ、すぐに、イかないでよ」

恭子

「んくっ……ん、うう……奥に、当たってる……わかる? ほり、これ……これ、子宮に当たつてんのよ」

恭子

「……うで……ちょっと……バツ、バカ! 気持ちはからってそんな大声出すんじゃないわよ! 誰かに聞かれたらいびーすんのよ…」

恭子

「意外とね……あんたのちん」とあたしのまんこ……悪くないみたいよ」

恭子  
恭子

「んくっ……んつ、んつ、んつ……うやつて……んんうつ、根元から……擦り上げて……んんうつ……」

恭子

「せうよ、これが……セックス……あ、んつ、んつ……あんたのちん」「あたしのまん」「で擦つてやってんのよ」

「あ、「こ」だ……ああ……あああつ……あたし、ね、んんつ、今、当たつてると「ころが、ふ、あ……いい感じなのよね~」

恭子  
「そり、ここが…………気持ちいいって意味  
んっく、あんたは、どうなの？」

「んふ、ふふつ、気持ちいい？ そりやそりよ  
ね。初めてのセックスなんだし……んん、興奮  
しまくつて……ふ、あつ、ギンギンになっちゃ  
うわよね」

恭子 「ああ、いいわよ。んんっ、あんたのほうから、  
動かなくて、ふあっ、リズムが狂っちゃうし…  
…あ、んんっ、童貞も卒業したばっかり、なん  
だから、んつ、んつ、んつ、あたしに、任せて  
おきなせじよ」

恭子  
「つていうか、んあつ、童貞卒業おめでとー、  
ん、あんつ、これであんたも、んつく、立派  
な、男ねー

恭子  
「あ、立派かどうかはわかんないか。んんっ、  
まつ、どっちでもいいけど、んっく、ふうひ…

恭子 「それよか、ん、ぐうつ、ちょっとじゅつ、速くしていいからね。マジで……すぐに出すんじやないわよ」

恭子

「ああ、なんか……思つてたよりも、い、いいかも……んつ、んつ、動くと、ち、ちゅうどいいといろに、当たつて……ん、ふつ……悪くないじゃない」

恭子

「きゅつて、締め付けた分だけ、んんつ、く……ぴつたり、張りつく感じで……あふ、あつ……まんこ」、熱くなってきた」

恭子

「まあ、あんつ、でも……ううひ、ちんこ」も熱い……あんた、けつこーす」「いじやない、ん、んつぐ、あんなに出したのに、んくつ、んくつ、まだ、こんなに、んんつ、硬くできるなんて……」

恭子

「まあ、童貞、だつたんだから、くうひ……興奮が、あ、んつ、おさまらないんでしょ? ナビ……んつ、んつ、んつ……」

恭子

「これで大量に出たら、あ、んつ、あんた、精液タンクよね、んんつ、く、ふうひ……」

恭子

「んつ、んうひ、そろそろ、んんつ、スピード上げていくわよ……んつ、んつ、んつ、んんんんつ……」

恭子

「っぶふひ、その氣持ち良さをうな顔……悪く、ないじやない、んうひ……んくつ、んくつ、う……奥のほうに、当たる……んくつ、子宫に響く、う、ああひ……」

「…」まで一方的に、するのひ、あ、んつ、初めてだけビ…「ふう、はまつちやいそう」

「ねえ、どう… んんつ、あたしのまん」…  
あ、んつ、どんなんふうに、感じてるか…ん、  
く、言ひなさいよ」

「んつ、んつ、く…ふう、うんつ…  
へえ、やうなのね…あ、んうつ…でも、  
もつと眺めさせてできるわよ…せりつ…」

「あははつ、なつせけない声ね、んうつ…女  
の子みたいじやない…く、ふつ…」

「顔だつて蕩けそつな感じになつちやつて…ん  
んつ、く…んふつ、ああ、あたしも、」、興  
奮しきちゃつ…ん、んんつ、く…」

「わかる? んんつ、まんこが、あ、んつ、どん  
どん、濡れてきてるの…ん、くわうつ…ち  
ん」でわかる?」

「ん、んんつ、う…何? また恥ずかしそうに  
して…んつ、んつ、」までやつてるんだか  
ら、あ、んつ、そろそろ慣れなさいよ」

「えつ? 言ひ方? うつ、んつ…え  
え、まんこの」と、まだ「うづうづ言ひ方にも  
照れてるの? あんたつて本当に…んつ  
く、ふ、ふふつ…」

恭子

恭子

恭子

恭子

恭子

恭子

恭子

恭子

恭子 「それじゃあ…………」「んなふうに抱きついで……耳元で言つてあげよつか?」

恭子 「あ、でも!」の体勢だとあたしは動きたくないから、あとはあんたが動きなさいよ」

恭子 「わっ、あんたが腰振つてちん!」おちんぽ、動かすの」

恭子 「あ、今、ビクッとした。おちんぽがビクッとしたのが伝わってきたわよ」

恭子 「ふふふ、なに慌ててんの? びっくりした? おちんぽって言い方……いやらしく?」

恭子 「本当は!」までするつもりなかつたけどなんか……あんた可愛いから、いっぱい興奮させたあげる」

恭子 「ほり、おちんぽ動かして……あんたのおちんぽで、あたしのおまんこ突き上げて……」

恭子 「あ、あんっ、わう……それでいいの、ん、んっ、ずっと、そんなふうに……んぐ、う、動いて」

恭子 「そしたら、あ、んうつ……もつと、Hツチな」と、耳元で言つてあげる」

恭子

「えう、ぐ、ふう……えう、え」「あ、いいわ、あ、おちんぽ、今、当たつてると」「う、あ、んんう、おまんこ、気持ち、いい、あ、んうう……」

恭子

「スペードは、んく、そ、そのくらいでも、いいし……ん、んう、特別に、くふう、あんたの好きな、よひに……んう、動いていいから……」

恭子

「はあ、ああう、ずぶう、ずぶうう、んうう、おちんぽが、奥に……んうう、くる……んふう、おまんこ」の奥に、きてるわよ

恭子

「えう、ふう……また、変な声出しつ……んく、う、そんなに、ドキドキするの？ んくう、おちんぽ、とか、おまんこ、とか……」

恭子

「……えう、なんだ。んふふう、そんなに、ん、んう、う……あたしの声で、あふ、あ、いやらしい、の、んうう、聞きたいんだ？」

恭子

「それじゃあ……じつぱじゅつてあげる……ううう、おちんぽ、いいわよ、んう、あなたのおちんぽ、とっても気持ちいい、わよ」

恭子

「気持ちいいから、んうう、おまんこ」で、きなつてしてあげる、ん、うう、おまんこでもなつて締め付けて、んん、うう、もひと、気持ち良くしてあげる」

恭子

「だから、あ、んうつ、やうつ……あんたも、動いて……んく、う、あたしのおまんこ、味わいなセごみ」

恭子

「あ、んうつ、やうつ、ちゅうと……速くなつてきた……んうつ、い、いい感じ、よ、んつ、んつ、んんんつ……」

恭子

「はあつ……おまんこい、あ、んつ、おまんこいいわ、あ、おまんこ、い、おまんこ、お、んうつ、おまんこ、おまんこ、お、おまんこが、あ、あ、あ、おまんこがいの、お、ふあつ……おまんこ、おまんこ、おまんこおおお……」

「…」

恭子

「ん、ふうつ、興奮した？ んうつ、おちんぽが、またピクシしてんだけど……ううつ、あんたつてわかりやすいのよね」

恭子

「でも、んうつ、悪くないわ、あ、んうつ、本當に、おまんこ、くぶつ、湯け、ちやいやうつ」

恭子

「ねえ、あんたも書うつ……おちんぽ気持ちいいつて、んうつ、やうつうの、ふあ、う、あたしにも、聞かせなさいよ」

恭子

「あたしももつと、ん、嘘ひて、あげる……  
んうつ、おちんぽ、気持ちいいから、あ、おち  
んぽ、気持ちいいって、嘘つてあげるか  
ら、あ、あ、あ、ああ……本当にいいの、お  
ちんぽ、擦れて、んんつ、本当に、気持ちいい  
から……」

恭子

「ああ、おちんぽ、いい、ふあつ、ん、おちんぽ  
いい、あ、ああつ、おちんぽ、あ、もつと、ん  
ああつ、おちんぽ、もつとして、ふあつ、おち  
んぽ、あ、そ」、おちんぽいい、から、おちん  
ぽ、ふ、あ、おちんぽ、おちんぽ、おちん  
ぽお、んんああつ、ちんぽちんぽちんぽおおお  
……」

恭子

「ぶつ、あははつ……はあーつ、さすがに、  
ちょっと……んんつ、あたしも恥ずかしくなつ  
てきたわ」

恭子

「嘘ごと過ぎると馬鹿つぱいわよね……つひ、  
あんたのちんぽ、いきなり硬くなつてない?  
今のも興奮しちやうの?」

恭子

「ふうん、んんつ、別に硬くなる分には、ん  
く、うつ……あたしも、気持ち良くなれるか  
ら、んくつ、いいんだけど……」

恭子

「ねえ……エッチな言葉も、いいけど……んくつ、ふ、んんつ……もつとす」「い事、ん、うつ……してあげよっか?」

恭子

「何をする気? んふふつ、何を、んつ、すると思つ?」

恭子

「たとえまーん、れろひー」「ひやひでれろつ、れろひつ……耳を舐めてみるとか。ふふつ、ここが、あ、んつ、性感帯の人つて、いるりしきし……」

恭子

「せつかく田の前に、んうつ、耳があるんだしね……ん、んうつ……綺麗にしてあげる……」

恭子

「まづはこっちから……れろおうつ、ん、れろつ、れろれろつ、ん、は……」

恭子

「れろおうつ、れろれろつ、ちゅぶつ、んはあつ……ん、れろつ、ちゅつ、れぶつ、ちゅつ、れろれつ……んんうつ、ふうつ、れろつ、れろれろれろつ、ふうううううつ……れろれろれろれろおおうつ!」

恭子

「ふふふつ、なうに、ピクビクしちゃつてんの。まさか、あ、んつ、耳で感じちゃつてるわけ?」

「体だけじゃなくで、あ、あんつ、ちんぽまで、ビクビクしてんのですケド」

恭子

恭子

「れろつ、れぱつ、んんつ、感じるなら、れろれ  
ろつ、はあつ、もつとして、あげる、れ  
ろつ、れろれろれろつ、お、ぢゅぶつ、び  
ちゅつ……！ れぶ、ぢゅつ、んはつ、あ、  
ん、れろお～つ、ん、れろつ、れろれろれろれ  
ろれろつ……！」

恭子

「ちょっと……ちんぽ、止まつてゐんだけ？  
れろれろれろつ、こちはここまでしてあげてるん  
だから、ちゅつ、ぢゅぶつ、そつちもちやんと  
動きなさいよ」

恭子

「んつ、んつ、やべ……そんな感じ……れろつ、  
れろれろれろつ、ん、ぢゅぶつ、れろお～  
うつ、ん、はあつ、れぶ、ちゅつ……ん、  
んつ……また止まつてゐるし……んふつ、そんな  
にいいんだ？」

恭子

「れろつ、れぶ、ちゅつ、れろれろつ、仕方ない  
から、れろお～つ、こちから動きながら、ん、  
んつ、耳も舐めてあげる」

恭子

「はあつ、れろつ、れろお～つ、ず、ちゅつ、れろ  
れろつ、ん、れろお、んぶつ、ちゅつ、ちゅ  
ぶつ、ん、ぬぶつ、れろつ、れぶちゅつ、ん、  
はあつ、あ……れろれろれろれろれろれろれ  
ろおお～～～～！」

「♪ふふつ、体、メチャクチャ震えてるじゃない。  
そんなにいいんだ?」

「それじゃあ……反対側もしてあげる」

「れろつ、れろれろつ、ん、ぢゅつ、れぶ、  
ちゅつ、んはあつ、れろおつ、れろれろつ、ん  
ぶつ、れぶ、ちゅつ、れろおつ、れろおつ、ん  
く、う、んんつ、れろれろれろれろおおへ  
～つ～」

「どう? 右と左で、れろつ、ぢゅつ、違つたり

する? んんつ、ちゅつ、れろつ、れろおつ、  
ん、ぱつ、れろれろつ、ん、ふうつ、れろおつ

……」

「ふふつ、れぶ、ちゅつ、その悶えた感じの声?  
…れろつ、ぢゅぶつ、れろおううつ、嫌いじや  
ないわ、れぶ、ちゅつ、んんつ、れろれろつ、  
んはあつ、ちんぽ、硬い……」

「あ、まだイかないでよ、れろつ、ん、「」で出  
されたら消化不良になっちゃうから……れろれ  
ろつ、もうちょっと楽しんでから、ね……ぢゅ  
ぶつ、れろつ、れろつ、ん……んぶ、う、れろ  
れろれろつ……」

恭子

恭子

恭子

恭子

恭子

恭子

恭子

「んは、ああつ、んん、う、れぶ、ちゅつ、れ  
ろつ、れろれろれろおつ、ん、ぶつ、れろつ、  
ん、ぶちゅつ、んは、ああつ、れろおつ、れ  
ろおつ、ん、ああつ、れぶ、う、れぶ、  
ちゅつ、れろつ、れろれれれろつ、ん、れ  
ぶうつ、れろれろれろれろれろれろれ  
ろおおおううううう！」

恭子

「んはあつ……あははつ、これけつこ一疲れるわ  
……れろつ、でも舐めちゃうけど……れろれ  
ろつ、ちゅぶつ、んはつ、れろおうつ、あん  
たのその声……だんだんゾクゾクしてきたし……  
」

恭子

「ちゅ、ぶつ、れろおうつ、れろれろつ、ん  
ふつ、結局、れろつ、ビーなの？ 耳で、ん、  
れぶつ、ちゅつ、感じちゃつたり、するの？」

恭子

「れろれろつ、ちゅつ……へえうつ、そーな  
んだ……れろつ、ん、ちゅつ、良かつたじやな  
い。れろつ、れろれろつ、自分の新しい性癖が  
知れて、れぶつ……！」

恭子

「もっと、奥まで……ん、れろおつ……れぶぶつ  
……奥まで舐めて、れちゅつ、ん、ぶちゅつ……  
……綺麗にしてあげる……れろおつ、れろれれれ  
れろれれれれれろつ……！」

恭子

「ふふふ、何よ、れろり、ちんぽ、ビクビクをせちやつて……れるおひ、んぷつ、ん、れぶつ、ちゅう……れるひ、れろり、れろおおうへつ、れろれろおお~~~~~!」

恭子

「ん、はひ、ふふ、口の周りべつとべとんたの耳もす」い事になつてゐわよ」

恭子

「そろそろちんぽも苦しそうだし……」「ひちむ本氣で腰振つてあげる。……もう体を起しやすのも面倒だし、」「——やつて抱き付いたまんまでいいわよね?」

恭子

「んぐうつ……ん、んんひ、あ、んあつ、う……ん、ん、んんひ、ほら、びうつ、いきなりちんぽの刺激が強くなつたのは……んんん、く……」

恭子

「あたしのまん」「で、んぐつ、搾り取つてあげる、ふ、ううひ、んんひ、ちんぽきゅつしてしで、んぐ、う、んんひ、おちんぽミルク、んんつ、びゅくびゅく出せやつてあげる、う、んんんん……」

恭子

「んはあつ、み、耳も、また、してあげよつか?  
あ、んんひ……れるひ、れろれろひ、ん、ちゅう、れぶひ、ちゅう……んぐうひ、ふ、はあつ、ああつ、これ、ヤバ……」

恭子

「なんですか、ん、くつ、知らない、けど……ふ、あ……ああつ、まんこ、あ、気持ち、い、んあつ……すつ」ぐ、いいとこに、んくあつ、当たる、ん、んんつ……」

恭子

「んふつ、あたし達つて、んん、れろつ、れろれろつ、相性、ふ、はあつ……れろおつ、いいのかもね……あ、んつ、んんうつ、く、ふつ……」

恭子

「だから、れろつ、れろれろつ、ちゅつ、れぶつ、まだ……出すんじゃないわよ？ れろおうつ、ん、んんつ、あたしが、満足するまで、んはつ、ちんぽ、おつ勃ててなさいよ」

恭子

「つていうか、もっと硬くしなさいよ！ んあつ、あ、ふああつ、このまま中出しでいいから、んくあ、んんつ、ずっと勃起させなさいよー」

恭子

「ん、んつぐ、あ、何？ そんな顔、して、あ、んんつ、中出しで、いいって、言つて、んくつ、く、ふうつ、びっくりしたの？ あははつ、今日は、あ、んんんつ、大丈夫、だから……」

恭子

「あなたは、あ、んんつ、余計な事考えてない  
で、ん、んぐ、れろつ、れろれろつ、ちんぽ勃  
ててればいいのよ、ん、れろつ、れろおおう  
うつ、ん、れぶちゅう！」

恭子

「んはつ、あ、ああつ、イキ、そ、あつ……は  
ああつ、童貞ちんぽ、んあつ、たまんない  
わあ、あ、ああつ、ん、んつ、んんつ、く、ん  
くつ、んくうつ、う、う、「ひひひつ……」

恭子

「ん、ふふつ、あんたも？ あんたも、ふ、  
あつ、イ、イキそうなの？ んつ、んんうつ、  
いい、わよ、んくうつ、あ、搾り取つて、ふ、  
くうつ、全部、ん、んん、う、搾り取つてあげ  
るから……！」

恭子

「耳も……れろつ、れろおつ、ん、ぢゅぶつ、  
ん、はあつ、れろつ、れろれろれろつ、く、  
ふうつ、ん、んんつ、れろつ、イキ、なさい  
よ、れろれろつ、ちんぽ、から、全部、れ  
ぶつ、ちゅうつ、ちんぽミルク、出しちゃいなれ  
いよ！」

恭子

「んつ、んんつ、中に、く、ふつ、まんこに中出  
し、して、いいから、あ、ふうつ、んんつ、  
せ、せーえき、中出し、ひ、ん、んぬう、  
く、ううう、ふうつうんつ！」

恭子

「んぐつ、んぐつ、う、ぶるりつ、く、あ  
ううつ、ん、んんつ、く、ふう、んつ、ん、  
ん、んつ、んんん、んんんんうつ、くふ、う、  
うあ、あ、んつ、はああつ、ああああつ、  
あ、あ、あつ……んはああああああああつ……  
……」

恭子

「ああああツツー……あ、あつ……  
い……ふ、はあ……あ、あ、あああつ……  
……ん、ふああつ、入つて、きてる……」

恭子

「わう、わうよ……もつと……ん、んん、うつ……  
…全部出して……ああ、あたしの……まんこ  
に、全部……まんこ」の中に出てしなれど

恭子

「もつと、きをひいて……んつ、んつ……擦り  
取つてあげるから……せりつ……」「うやつて……  
…根本から擦りあげたら……全部出るで  
しょ。」

恭子

「ふふつ、その顔と声……いいじゃない。童貞を  
食べちゃつたって実感がわいてくるわ」

恭子

「あう……もつ出ない? 全部出たの? んつ……  
……んんつ……ふふつ、わすがに出しぐくしたみ

たいね」

恭子

「よじょつ……はあつ、すつきりした。あ  
たしもイチャついたわ」

「ふふつ、」「うううのは初めてだつたけど……童  
貞を握つ尽くすのつてサイゴー……」

「うつわ、ドロドロしたのが出でへる。あ、あ……  
…多すきで」「せれちゃう」

「これ、このまま出したら床が酷い事になりそう  
ね。でも、この状態でトイレに行くわけにもい  
かないし……そつだ！　あんた、そこに寝たま  
までいいから口開けなさいよ」

「なんぞつて……ああ、説明してる暇ないから！  
早く！…………そつ、それでいいのよ」

「あとは…………あんたが出したものなんだから  
自分で責任とつなさいよね。このまま口の中に  
出してあげる」

「はああ…………ほおら、まんこの中から精液  
出でる…………あんたのちんぽミルク、こんなに飲  
み込んでたのよ」

「あ、んつ…………んんつ…………」「ぼせないよう」に飲み  
なさいね。…………んつ、んつ…………ん  
うつー」「

「ふふつ、と、あえず全部出たかな。あとはトイ  
レで綺麗にしどかないと」

恭子

恭子

恭子

恭子

恭子

恭子

恭子

恭子

恭子

「それじゃ、あたしは帰るから。後始末ちゃんと  
しどきなさいよね」

恭子 「あ、それから……先生に没収された本、あんた  
が弁償しなさいよ。代金の請求するからね」

恭子 「そうだ。最後にもう一つ……今日の事が忘  
れられなくて、またちんぽイジメてほしくなつ  
たらあたしんと」来なさいよ」

恭子 「気分が乗つたら……また精液搾り取つてあげる  
から……」